可能であるが、非対格動詞が結果構文をとれない。

2.3　原因と結果

結果構文と言われるものは、なんらかの方法で動詞が目的語に働きかけた結果を明示した構文のことであるから、動詞は働きかけの意味をもったものでなければならない。このような動詞を "do-to verbs" と総称することにする。この働きかけが原因となって目的語が別の行動を起こす場合はこれを使役構文、目的語がある種の状態変化を起こした場合は結果構文と呼ぶ。従って、ここでは、いわゆる使役構文と結果構文を総称して使役構文と言い、一般に言われる使役構文を「行動（action）使役構文」、結果構文を「状態（state）使役構文」と呼ぶことにする。

状態使役構文の補語の部分が後でつけ加えられたという意味でこれを「二次述語」と呼ぶとすれば、二次述語は結果の状態を表すために基本的に形容詞句がくることが多いが、(39a) のように名詞句もくる。

(39)　a．John painted the car *a strange shade of yellow*.　[NP]

　　b．John painted the car *yellow*.　[AP]

だが、a strange shade of yellow は色の一種であり、たまたまこういう名詞句でしかこの色を表現する方法がないから名詞句の形式を選ばざるとえなかったのであって、SVOC の C の部分に何がくるかは、意味を英語がどのような仕組みで表現できるかという repertoire によって決まる。

2.4　拡大の総体的メカニズム

さて、ここで使役構文や接触動詞、視覚動詞の派生構文がどのようなメカニズムで派生されるかということを明らかにしておこう。すでに明らかなように、これらの派生構文は、典型的な文と、それぞれの構文をとる性質をもった動詞が混交してできたものと考えるのがもっとも合理的である。視覚動詞は、(40a) のような see をモデルに、look が重なってできた混交構文である。SAW としたのは、モデルとしての動詞であることを明示したものである。look が at をとらないのは、SEE をモデルにした当然の結果である。

(40)　a．John SAW me in the face.

　　b．John looked me in the face.

self 構文も全く同じく GET をモデルにした構文で、自分自身に対する働きかけの意味であるから self を必要とする。

(41)　a．Philippa GOT herself to sleep.

　　b．Philippa cried herself to sleep.

自動詞起源の self 構文の再帰代名詞は文の SVOC の形式を整えるための擬似目的語（false object）であるというのが一般的な主張であるが、決して擬似的ではなく、働きかけの対象であるから self が存在するのである。

way 構文も進行を表す GO をモデルにした混交構文である。

(42)　a．The boy WENT his way through the crowd.

　　b．The boy pushed his way through the crowd.

2.5　概念構造の統語構造への写像という考え方

Jackendoff（1990）は概念構造を統語構造へ写像するという基本的な統語構造の説明の立場から、概略（43b）で表された概念構造から、さまざまな手続きをへて表面構造（43a）に写像されるものとする。福地（1995）も基本的には Jackendoff の立場を踏襲しながらも、(43c) に示したように、基底構造では、前置詞 to と同じ働きをする結果の前置詞要素 TO が節［the actor off the stage］を目的語としてとり、その中の the actor が繰り上げられて（43a）のような構造に写像されるという立場である。

(43)　a．The audience laughed the actor off the stage.

　　b．The audience MADE the actor (GO) off the stage BY laughing.

　　[Jackendoff 1990]

　　c．The audience laughed TO^{j} [the actor off the stage]^{j}　　[福地 1995 : 88]

Jackendoff の考える写像にはかなり複雑な手続きがいるため、簡略化したものが福地氏の提案であるが、やはり、構造を平面的にとらえるという考え方をとることが原因になって、D 構造から S 構造への写象のプロセスが複雑すぎ、実際の母語話者の直観を反映しているとは言いがたい。